

茶園におけるチャノキイロアザミウマの黄色平板トラップによる発消長

徳永保利・間曾龍一・黒木重光 (宮崎県総合農業試験場茶業支場)

Yasutoshi TOKUNAGA, Ryuichi MASO and Shigemitsu KUROKI : Seasonal Occurrence of Scirtothrips Dorsalis HOOD by Yellow Flat Board Trap in the Tea Field

茶樹を加害する害虫は約100種類ほどが確認されているが、本県における害虫はハダニの他約6種ほどが主要害虫となっている。重要害虫もこれまでのハマキムシ類の食害による被害から、最近では吸汁性害虫による茶樹の全身的な被害へと変化しており、防除の困難性と生産性への影響が大きくなっている。吸汁性害虫の中でチャノキイロアザミウマについては、これまで年間の発消長が明らかでなく防除効果が充分でなかった。このため本県における発消長を明らかにする目的で、黄色平板トラップを利用して調査を行い、その有効性を検討したので報告する。

1. 調査方法

調査材料は色相マルセルナンバー75Y、明度8.5、採度10.0、大きさ21cm×30cmの黄色板に20cm×25cmの粘着シートを片面に張り付けたトラップを用いた。調査茶園は一般管理の成園を用いた。調査位置は摘採面より35cm、80cmの高さで行い、半月ごとに捕獲頭数を調査した。調査時期は1988年4月から11月まで実施した。

2. 結果及び考察

本虫は4月から11月まで成虫、幼虫、卵が混生しており、越冬は成虫か蛹でハマキの巻葉内、落葉内に多く、産卵は若葉よりも成熟葉に多いと報告されている。

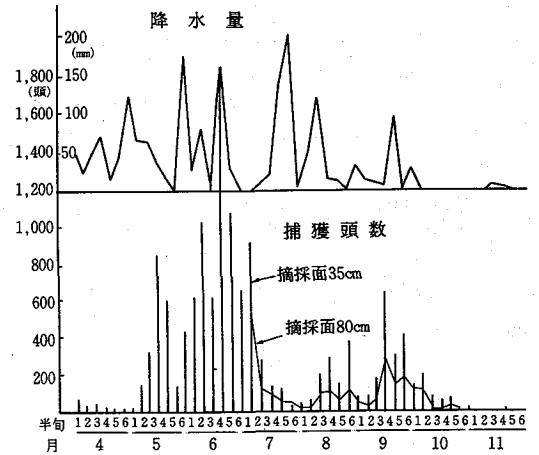
調査の結果から発生の時期は4月から11月まで捕獲されたが、11月には急激に少なくなり、このまま越冬したものと思われる。捕獲頭数の最も多い月は6月であり、次いで7月、5月の順であった。7月下旬からは低い密度で推移したが、発消長に影響したと思われる気温、降水量、薬剤散布については第1表のとおりである。発生の多い5月から7月までと、少ない8月から10月までとは気温による影響は考えられず、また薬剤散布も特に7月以降に多いという事もないことから、発生を長期にわたって左右する影響があったとは思われない。月間の降水量をみると7月までは多いが、集中的であり、8月からの降水量はやや少ないが、連続的な降雨で常に茶芽が濡れた状態にあったことが発生量に影響したものと考えられた。

摘採面からの高さ別捕獲頭数では摘採面に近いほど多く捕獲され、離れるにしたがい少なくなった。したがって本虫の行動範囲が摘採面に近いほど活発であり、水平行動が多いものと思われた。

年間の発生回数はこれまで不明であったが、本調査の結果から8回ほどの発生が明らかになった。本虫は各世代が混生して常に茶芽を加害すると見られていたが、明

らかな発消長のあることが確認された。

以上のことから茶園におけるチャノキイロアザミウマの発消長は黄色平板トラップを利用して、摘採面に設置し半月ごとの調査で把握できると思われる。



第1図 摘採面からの高さ別発消長と降水量

第1表 調査園における気象及び薬剤散布

月別	平均気温	最低気温	降水量	薬剤散布
4	(℃) 14.6	(℃) 9.4	(mm) 249.5	ニツランV散布
5	18.9	14.1	293.5	
6	22.3	18.7	851.6	スプラサイド散布
7	25.9	22.3	380.0	ホスクリン散布
8	25.7	22.2	202.0	バダン散布
9	23.3	19.6	153.0	ナパール、 ビスダイセン散布
10	18.1	12.4	29.5	テデオ、 バダン散布
11	11.6	4.0	10.5	